

(23) 以下の通り訂正いたします。

P446 共同発表者削除

誤

205) 乳幼児をもつ母親の主観的幸福感についての研究
—地域子育て支援拠点事業の利用・非利用者の比較
検討—

○下地清香¹、我如古愛花²、小八重佑果³、山城 歩⁴、
島田友子⁵
¹浦添総合病院、²琉球大学附属病院、³九州医療セン
ター、⁴三菱京都病院、⁵名桜大学

【目的】

本研究は地域子育て支援拠点事業を利用している母親（利用
者）と利用していない母親（非利用者）を対象に、主観
的幸福感を比較検討し、乳幼児をもつ母親に必要な支援に
ついて示唆を得ることを目的とする。

【方法】

1. 研究対象：A市地域子育て支援拠点事業の利用者と非
利用者。2. 調査期間：平成27年7月～9月。3. 研究
（データ収集）方法：質問紙調査。伊藤らによる主観的幸福
感尺度（SWB 尺度）を使用、統計分析にはSPSSver19を
使用し、有意水準は5%とした。4. 倫理的配慮：A大学
人間健康学部看護学科の研究倫理審査による承認を得た。
研究への参加は自由意志であること等を口頭と文書で説明
し、同意書への署名を持って同意を得た。

【結果】

回収数161名（64.1%）。有効回答は利用者98名（75.3%）、
非利用者59名（48.7%）。利用者群が地域子育て支援拠点
事業の存在を知ったのは、公的な場所（市役所、市立図書
館など）48人（49%）が最も多く、次いで人から聞いた
38人（38.8%）が多かった。非利用者群のうち、地域子育
て支援拠点事業を聞いたことがある人は55人（93.2%）で
あった。利用者が地域子育て支援拠点事業を利用する目的
は、気分転換71人（72.4%）が最も多く、次いで親同士の
交流65人（66.3%）が多かった。主観的幸福感尺度（総得
点：48点）について、12項目全体の総合得点の平均点37.03
点、利用者群の総合得点の平均値37.47点、非利用者群の総合
得点の平均値36.29点であった。Mann-Whitney U検定によ
る比較では、4領域のうち《達成感》（ $P=0.014$ ）に有意
差がみられた。

【考察】

利用者群は、各自治体の他に身近な人との関わりの中で情
報を得ており、子育て支援の情報源として地域における対
人関係ネットワークが重要になってくることが考えられ
る。主観的幸福感尺度の12項目中、3項目と《達成感》領
域の得点の利用者群の方が有意に高かったことは、地域子
育て支援拠点事業の利用によって適度な気分転換や親同
士の交流を行うことで心のゆとりが生まれ、幸福感が高
まったのではないかと推察する。清水らは子育て中の母親
は「様々な人々と話したり、聞いたりというコミュニケー
ションの中で多くのことを学んだり、気づいたり、確かめ
たりすることで、自分の気持ちの持ち方を調整」している
ことを明らかにしている。利用者群は親同士の交流の中
で、日頃の不安やストレスを軽減しているのではないかと
考える。また、総得点の平均値、4つの項目と【自信】と
【人生に対する失望感のなさ】の領域の得点では30歳以上
の群の平均点が有意に高かった。利用者群のうち、30代が
全体の7割を占めることから同年代の母親が集まりやす
く、人間関係も築きやすいことが推察された。

正

205) 乳幼児をもつ母親の主観的幸福感についての研究
—地域子育て支援拠点事業の利用・非利用者の比較
検討—

○下地清香¹、我如古愛花²、山城 歩³、島田友子⁴
¹浦添総合病院、²琉球大学附属病院、³三菱京都病院、
⁴名桜大学

【目的】

本研究は地域子育て支援拠点事業を利用している母親（利
用者）と利用していない母親（非利用者）を対象に、主観
的幸福感を比較検討し、乳幼児をもつ母親に必要な支援に
ついて示唆を得ることを目的とする。

【方法】

1. 研究対象：A市地域子育て支援拠点事業の利用者と非
利用者。2. 調査期間：平成27年7月～9月。3. 研究
（データ収集）方法：質問紙調査。伊藤らによる主観的幸福
感尺度（SWB 尺度）を使用、統計分析にはSPSSver19を
使用し、有意水準は5%とした。4. 倫理的配慮：A大学
人間健康学部看護学科の研究倫理審査による承認を得た。
研究への参加は自由意志であること等を口頭と文書で説明
し、同意書への署名を持って同意を得た。

【結果】

回収数161名（64.1%）。有効回答は利用者98名（75.3%）、
非利用者59名（48.7%）。利用者群が地域子育て支援拠点
事業の存在を知ったのは、公的な場所（市役所、市立図書
館など）48人（49%）が最も多く、次いで人から聞いた
38人（38.8%）が多かった。非利用者群のうち、地域子育
て支援拠点事業を聞いたことがある人は55人（93.2%）で
あった。利用者が地域子育て支援拠点事業を利用する目的
は、気分転換71人（72.4%）が最も多く、次いで親同士の
交流65人（66.3%）が多かった。主観的幸福感尺度（総得
点：48点）について、12項目全体の総合得点の平均点37.03
点、利用者群の総合得点の平均値37.47点、非利用者群の総合
得点の平均値36.29点であった。Mann-Whitney U検定によ
る比較では、4領域のうち《達成感》（ $P=0.014$ ）に有意
差がみられた。

【考察】

利用者群は、各自治体の他に身近な人との関わりの中で情
報を得ており、子育て支援の情報源として地域における対
人関係ネットワークが重要になってくることが考えられ
る。主観的幸福感尺度の12項目中、3項目と《達成感》領
域の得点の利用者群の方が有意に高かったことは、地域子
育て支援拠点事業の利用によって適度な気分転換や親同
士の交流を行うことで心のゆとりが生まれ、幸福感が高
まったのではないかと推察する。清水らは子育て中の母親
は「様々な人々と話したり、聞いたりというコミュニケー
ションの中で多くのことを学んだり、気づいたり、確かめ
たりすることで、自分の気持ちの持ち方を調整」している
ことを明らかにしている。利用者群は親同士の交流の中
で、日頃の不安やストレスを軽減しているのではないかと
考える。また、総得点の平均値、4つの項目と【自信】と
【人生に対する失望感のなさ】の領域の得点では30歳以上
の群の平均点が有意に高かった。利用者群のうち、30代が
全体の7割を占めることから同年代の母親が集まりやす
く、人間関係も築きやすいことが推察された。